

戦争には「前史」と「前夜」がある

日本の戦争指導者がたちが踏み越えていった、数々の「point of return(戦争回避不能な段階)」とは何か—

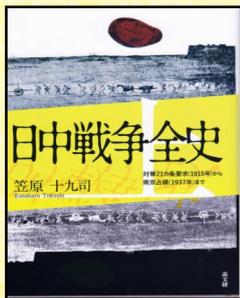


2019 不再戦・平和

講演とティスセッション

日中全面戦争とは何だったのか

100万の日本軍が送り込まれた戦場で何が行われたのか—日本人の欠落した歴史認識を埋める、日中戦争とアジア太平洋戦争の全貌に迫る



左は、笠原先生が2017年に上梓された「日中戦争全史」上・下の表紙です。「—高文研刊」

日本は中国で何をしたか
—侵略と加害を考へる—

日時 2019年 8月 25日 (日)
14:00~16:30 開場13:30

会場 エル・おおさか (天満橋)
南館5階 ホール

講演 笠原十九司 氏
(都留文科大学名誉教授)

● コメンテーター

副島 昭一さん

(和歌山大学名誉教授)



* オープニングは、命、平和への思いを透明感のある声に託して歌い続ける、歌手の野田淳子さんのミニコンサートです。

資料代 1,000円

2019 不再戦・平和 講演とディスカッションのご案内

2019年度の日中不再戦月間（7月～9月）企画として、南京事件研究で名高い、笠原十九司先生をお招きして日中戦争全史をもとに、日本の侵略と加害の歴史を学ぶ講演会を企画しました。従来の歴史書であまり紹介されてこなかった史実や、近著「増補 南京事件論争史」にも触れて講演していただきます。当時の状況が現在の安倍政権の戦争への道といかに似ているかを知り、中国への加害行為を反省し、日中不再戦、平和運動をすすめていくうえで絶好の機会です。フロアからの質疑応答なども予定しています。みなさんに来場していただきたく、ご案内申し上げます。

笠原十九司先生が語る 今回の講演要旨



日中戦争（中国にとって抗日戦争）当時、中国大陸ではいつも日本軍にたいする二つの戦場が存在しました。中国ではこの二つを「正面戦場（国民党軍戦場）」と「後方戦場（共産党軍戦場）」と呼んでいます。正面戦場では、日本軍は国民政府軍（国民党軍）と近代兵器を総動員しての正規戦を展開し、後方戦場（敵後戦場・解放区）では共産党軍（八路軍・新四軍）が日本軍にたいしてゲリラ戦を展開しました。

講演では、二つの戦場における日本軍の典型的な作戦について、後方戦場については、ナチスドイツのホロコーストに比肩される日本軍の治安戦（中国では三光作戦・三光政策と呼ばれる）を事例に、正面戦場については、世界史上空前の長期、大規模な都市無差別爆撃であった重慶爆撃を事例に、日中戦争における日本軍の侵略・残虐行為の歴史実態に迫っていきます。

講師プロフィール 1944年群馬県生まれ。都留文科大学名誉教授。東京教育大学大学院修士課程中退。学術博士（東京大学）。専門は中国近現代史、日中関係史、東アジア国際関係史。主な著書 「南京事件」（岩波新書、1997年）、「南京難民区の百日一虐殺を見た外国人」（岩波現代文庫、2005年）、「日本軍の治安戦―日中戦争の実相」（岩波書店、2010年）「海軍の日中戦争」（平凡社、2015年）「日中戦争全史（上・下）」（高文研、2017年）「増補 南京事件論争史」（平凡社ライブラリー、2018年12月）

■ 副島 昭一さん（和歌山大学名誉教授）

東京大学大学院修士課程修了 研究領域；近現代日中関係史

著書；『世界の中の日中関係』（共編著）『日中戦争と第二次世界大戦』（共著）



■ 野田 淳子さん シンガーソングライター

エスペ란ティスト。1970年アメリカのフォーク歌手ジョーンバエズに魅せられ（株）電通を退社、上條恒彦に出会い歌手の道を歩き始める。「大きな歌」の作者中島光一と出会い、関西に移り、現在京都在住。平和、反戦を歌いつづけ、近年は、童謡・唱歌を戦前のように戦意高揚の役割をさせない思いを各地のコンサートで歌っている。CD「私の金子みすゞ」（2005）「ベストアルバム」、「上條恒彦ジョイント 夢果てしなく」（2007）等